

Survivors' Diet : Robinson on the Island of
Tori-shima

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水間, 千恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1144

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ザバイバーの食卓

——鳥島のロビンソン——

水 間 千 恵

はじめに

『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe, 1719)は、四年余りにわたって無人島で生きのびた水夫アレクサンダー・セルカーク(Alexander Selkirk)をモデルにした物語とされているが、同作の影響を受けて石井研堂が創作した『鯨幾太郎』(一八九四年)にも、実在のモデルが存在した。かねてより名前が挙げられていたのは中濱万次郎(一八二七—一九八)^①である。土佐の漁村で生まれ、海難事故をきっかけに十余年にわたる異国暮らしを余儀なくされたものの、先進的な知識や技術を身に着けて帰国したおかげで士分にとりたてられ、維新後も新政府に重用された人物である。貧しく無学だった少年が、努力と忍耐によって困難を克服し、社会に役立つ大人に成長するというサクセスストーリーは道徳教材としての適性

十分であり、波乱万丈な人生も、そのまま冒険物語の主人公に据えるにふさわしい。このため、万次郎をモデルにした児童書は、明治時代以来こんにちに至るまで数多く出版されてきた。石井研堂の『鯨幾太郎』はそのなかでも最初期のものである。ただし、井伏鱒二の『ジョン万次郎漂流記』(一九三七年)を嚆矢として、ノンフィクション作品が大半を占めるなかあって、研堂は万次郎の人生を下敷きにしつつも、超人的な少年が活躍する冒険活劇に仕立てた。この点、すなわち、完全なフィクションであるという点で、『鯨幾太郎』は、万次郎関連の作品のなかでは異色の存在といえる。フィクション化にあたって、研堂は、万次郎の実人生において五か月弱の経験に過ぎなかった無人島暮らしを、十年以上にわたるサバイバル体験へと拡大し、物語全体の約四割を占める主要な柱に据えた。このこと自体は、『ロビンソン・クルーソー』を意識した創作である以上、当然の変更だといえる。だがここで注目すべきは、

その拡大された無人島サバイバルのエピソードにも実在のモデルが存在したことである。その人物とは、万次郎と同じく土佐出身の漂流民で、彼に先んじて同じ無人島で十二年四か月にわたってサバイバル生活を送った野村長平（一七六二頃—一八二二）である。^② 生還後の長平については、名字を許されたものの、藩からの捨扶持を得て暮らし、二〇余年後に亡くなったことが伝わるのみで、子孫の有無も定かではない。^③ 当然のことながら、栄達の道を行んだ万次郎とは異なり、全国津々浦々にその名を知られるということはなかった。だがじつは、『鯨幾太郎』が出版されたのち、彼は「土佐のロビンソン」もしくは「日本のロビンソン」として、子ども向けの冒険物語にたびたび登場している。

本稿では、長平を主人公とする子ども向けのロビンソン変形譚を複数とりあげて、食べものに関する描写を分析する。^④ 「食」をキーワードに設定するのは、そもそもサバイバルストーリーとして成立したロビンソン変形譚において、食べものこそが作品の主題を映し出す鏡として機能するからである。なお、本稿での取り組みは、日本におけ



写真1（右上） 長平の墓石。2006年に記念碑とともに現在の場所（香我美駅前）に移設された。

写真2（左上） 長平を顕彰した記念碑。1928年に地元の青年団によって設置された。

写真3（左下） 長平像。「無人島長平」生還200周年記念事業の一環で、1998年に設置された。

る子ども向けロビンソン変形譚の歴史の全体像を詳らかにする研究の一環であり、(1)『ロビンソン・クルーソー』の翻訳受容史研究、(2)デフォー作品以外の変形譚の翻訳受容史研究、(3)純粹和製変形譚の歴史研究という三分野のうち、最も先行研究の乏しい(3)に資するものである。

一 分析対象とその典拠

本稿においては、分析の対象を、長平を主人公とする子ども向けの読み物のうち、全国規模での流通を意図して出版され、かつ、明確な物語性を有する作品に限定した。ジャンルの変遷を確認するためには、販路と読者層が限定される自費出版物や地域限定の出版物を排除したうえで、人物造形や感情描写等に作家の独自性が表出するフィクション性の高い作品を選ぶことが必要だと考えたからである。その結果、伝承物語に分類される短編や、古い漂流譚をただ現代風に書き改めたノンフィクション性の濃い作品がはずれ、以下の四作品が残ることになった。⁽⁵⁾

これらの作家たちが長平に関する情報源として依拠したのは、主として江戸時代の漂流譚である。『鯨幾太郎』を著した石井研堂はそれらの収集家としても名を残しており、彼が出版した『漂流奇談全集』(一九〇〇)には、長平関連の文献が四点収録されている。収録順に、「鳥島物語」「無人島談話」「漂流日記」「無人島漂流口書」

資料1 分析の対象とする四作品

著者	タイトル	出版者	出版年
北村重敬	『土佐の長平漂流談 — 日本のロビンソン』	開発社	1901年
南洋一郎	『水夫長平無人島漂流記』	偕成社	1943年
谷 真介	『鳥の島漂流記』	講談社	1980年
三田村信行	『にっぽんロビンソン — 土佐の長平・無人島漂流記』	ポプラ社	1998年

の四点である。⁽⁶⁾

そもそも一口に漂流譚と言っても、その内容や形式は多様である。たとえば春名徹は、①役人が帰国漂流者から聴取・記録した「漂流口書」(今でいう公的調書)、②学識者が聴き取ってまとめた「編纂物漂流記」、③権力や権威とは無関係な場で帰国漂流者が自由に語った経験談を書きとめた「炉辺談話型漂流記」、そして④漂流者自身

による「自筆記録」の四分類を提示している。⁽⁷⁾ 研堂の『漂流奇談全集』に収録された四文献をこの分類にあてはめると、「鳥島物語」が②からの派生品、「無人島談話」が②、「漂流日記」が④、「無人島漂流口書」が①に該当すると考えられる。⁽⁸⁾ いずれも、江戸時代から写本の形で流布していたもので、このほかにも、長平とともに無人島を脱出して生還した水夫たちに関する記録類が各々の出身地を中心に数多く残されており、なかには『坐臥記』⁽⁹⁾のように、明治時代以降に印刷出版されて流通した例もある。

資料2 鳥島への漂着船に関するおもな記録

	漂着時期	漂着船	漂着者数	生存者数	在島期間
①	元禄10 (1697) 年	日向国志布志浦弥三右衛門船	5	5	2ヶ月余
②	享保 5 (1720) 年	遠江国新居筒山町五兵衛船	12	3	20年余
③	元文 4 (1739) 年	江戸堀江町宮本善八船	17	17	1ヶ月未満
④	宝暦 3 (1753) 年	和泉国箱作村鍋屋五郎兵衛船	5	2	約6年
⑤	宝暦 9 (1759) 年	和泉国波有手村佐市郎船	5	5	数日
⑥	宝暦 9 (1759) 年	土佐藩船大宝丸	18	18	1日以内
⑦	天明 5 (1785) 年	土佐国赤岡浦松屋儀七船	4	1	12年余
⑧	天明 8 (1788) 年	大坂北堀江備前屋亀次郎船	11	9	9年余
⑨	寛政元 (1789) 年	日向国志布志浦中山屋三右衛門船	6	4	7年余
⑩	天保12 (1841) 年	土佐国の漁船	5	5	4か月余

(注1) ⑦が長平のケース、⑩は万次郎のケースである。

(注2) ②の生存者は③の船に、④と⑥の生存者は⑤の船に乗って帰国を果たした。

前記作品の作家四名のうち、昭和二〇年以前に作品を発表した北村と南は、研堂の著作を参照しえたはずだが、いずれも独自に写本を入手して、その情報をもとに執筆したと述べている^⑩。戦後になると、漂流譚は研究者たちの手で次々と翻刻出版され、また八丈島經由帰国した長平たちに関する記録を含む『八丈実記』^⑪の翻刻版も一九六〇年代に登場し手軽に参照できるようになった。昭和後期から平成にかけての二人の作家(谷、三田村)は、このような印刷物も依拠資料として挙げている。

比較を行うに際しては、典拠文献の違いに由来する差異を作家の独自性だと断定することのないよう注意する必要がある。とはいえ、彼らが挙げている依拠資料自体の性質がそもそも多様であるうえに、明示していない資料を参照している可能性もあるため、ソースにこだわると、当初掲げた研究目的を見失いかねない。たとえば、『土佐の長平漂流談』^⑫——日本のロビンソン』は、長平が一三回忌のさなかに帰郷したというドラマチックなエピソードで幕を閉じているが、これに関する情報が北村の挙げた参考文献に由来しないからといって、彼独自の創作だとみなすのは早計である。同様に、同じエピソードを収録する作品がほかにあるからといって、この情報を記した一次文献を探すのは本末転倒である^⑬。そもそも、長平を主人公にした物語群は、長平という実在の人物に関する記録とそれをもとに創作された物語とが、同列で参照・引用されて新たな作品が生み出されてきたジャンルであって、長平の物語をロビンソン変形

譚（後代の作家たちがデフォー作品を書き換える形で発展してきたジャンル）の系列に組み込んで分析することの意味もここにある。本稿が、以下、「何を」ではなく「どのように語られているか」を中心に論じるのもこのような理由による。なお、ソース探しを目的とするものではないが、その分野の研究の進展に資するために、調査の過程で明らかになった情報についてはなるべく記録にとどめるよう心掛ける。

二 長平のサバイバルと「食」

長平が漂着したのは伊豆諸島南端の鳥島である。東京から約六〇〇キロメートル南に位置するこの島は、四方を切り立った岸壁に囲まれた火山島で、湧水がなく食用植物にも恵まれていない。だが、季節風や潮流の関係でしばしば難破船が漂着しており、一七世紀から一九世紀に限っても、百人以上の船乗りがこの島に上陸していたことがわかっている。漂着例の一部を資料二に示す^⑭。これらの事例を詳しく調べると、島での滞在が短期間だった場合は、漂着者全員が生きて島を脱出できる可能性が高かったことがわかる（①③⑤⑥⑩）。島での暮らしが短いというのは、脱出の手段があったという^⑮ことであり、船の破損状況が軽くて自力航行が可能だった、あるいは、ほかの船が運よく到着したり通りかかったりして、救助してもらったことができた、といった状況が考えられる。これに対して、

唯一の脱出手段である船を失っていた場合には、必然的に在島期間は長くなり、漂着者の生存率も低下したことが想像できる。②④⑦⑧⑨のケースはそのような事例である。その一方で、船を失ったとしても、島に先着者がいた場合には、後着漂着者の生存率は向上する。後着漂流者は、先着漂流者が蓄積したその土地に関する知識やそこで暮らすためのノウハウを伝授してもらえるため、サバイバル力が補強されることがその一因として考えられる。たとえば、ともに脱出した⑦⑧⑨のうち、⑦よりも⑧⑨のほうが、生存率が高い。じつは、この⑦こそが長平のケースである。

長平が乗り組んでいたのは、藩から御蔵米の運搬を請け負った赤岡浦松屋儀^⑮七所有の廻船で、目的地で船頭が下船している間に、悪天候にみまわれて舵を失い、風と潮に流されるままに二週間近くかけて鳥島近くへと運ばれた。長平は仲間の水夫三人（源右衛門、長六、甚兵衛）とともにかるうじて島に上陸したものの、船は岸壁に打ち付けられて大破し、食料はおろか一切の物資を運び出すことができなかった。ほぼ身一つで島に上陸した彼らの生活は厳しく、漂着から二年とたたないうちに仲間たちは持病を悪化させたり、脚氣を思わせるような症状を呈したりして次々と落命する^⑯。だが、その翌年には新たな漂着者（⑧）を、二年後にはさらなる漂着者（⑨）を得て大所帯となり、長平は彼らと力を合わせて漂着物を集めて船を造り、島を脱出したのである。

そもそも、無人島生活者の食生活を決定づける要素としては、

「持込食料の量」「島の豊潤度」「道具の有無」「サバイバー自身の能力」などが考えられる。食料を一切持たずにサバイバル生活がスタートした場合、遭難者は、現地の植物、動物、海産物等を食べて生きていくことになる。つまり、その土地の豊かさはサバイバーの食卓の豊かさの前提条件なのである。とはいえ、食材調達が可能なら島であったとしても、狩猟採集に使う道具や調理道具がなければ、豊かな食生活は保証されない。また、サバイバー自身が、見慣れぬ動植物を食材として認識するための知識や、それを手に入れるための技術や体力、調理や食品加工に関する知識や技術を身につけていなければ、どれほど環境に恵まれていたとしてもそれを活かすことはできないだろう。

島島上陸後の食料事情については、長平の次のような証言が残っている。

孵も右時化にて、是又破損仕候間、夫食類は一切無御座、火道具等も、無御座候間、磯邊にて貝類を取夫食に仕、其後は、右島に白き鳥夥敷有之候間、右の鳥を取、是又夫食に仕、四人の者漸助命仕候。右の通生貝、生鳥を日々夫食に仕、水は天水斗を當テに仕候間、度々水に飢、無之非潮を給候儀、數度御座候。

このように、長平のサバイバル生活は、けっして豊潤とは言えない島で、持込食料なし・道具なしという悪条件のもとでのスタート

資料3 サバイバーの「食」を決定づける要素

持込食料	少ない ⇔	多い
場所の豊潤度	低い ⇔	高い
道具	少ない ⇔	多い
サバイバーの能力	低い ⇔	高い
食の内容	貧しい ⇔	豊か

がいたため、天水を貯める池を作ることが可能になり、飲み水の問題も改善された。つまり、長平にとって、後着漂流者の到来は、「食」を決定づける要素のうち「道具」に加えて知識・技術面、すなわち「サバイバー自身の能力」という項目に関する得点を飛躍的に向上させることができただけである。後着漂流者が長平の生活にもたらしたのは、これだけではない。サバイバーの増加は、労働力の増加をも意味する。漂着物をはぎ合わせて船を完成させるといふ大仕事を完遂できたのも、道具と知識と技術と労働力が揃ったからこそである。こうしてみれば、最悪の条件下で始まった長平のサバイバル生活が、生還という幸運な結末を迎えるに至ったのは、後着漂流者たちの存在があったからということがよくわかる。¹⁸⁾

だったのである。彼の食生活が大きく改善されるのは、後着漂流者たちが加わってからのことである。大坂船と薩摩船の乗組員たちが火や道具を持ち込んでくれたおかげで、それまでは生あるいは干して食べるしかなかった鳥や魚を、焼いたり煮たりして食すことができるようになったのである。しかも、後着漂流者のなかに、現地調達した材料を使って漆喰を作ることのできる者

三 物語に描かれた「食」——アホウドリ

鳥島でのサバイバーたちの「食」を特徴づけるのは、アホウドリへの依存度の高さである。穀類、果実、野菜、根菜などに恵まれません、釣りにはずしも適さない険阻な海岸線をもつ鳥では、唯一手軽に調達できるのが、人を恐れず動きも緩慢な巨大な白い鳥だったからである。二〇世紀初頭まで、鳥島はアホウドリの一大繁殖地として知られており、十月から五月ごろにかけての繁殖シーズンには、鳥全体が白く見えるほどおびただしい数の鳥が飛来していたという。長平を含めて鳥島に漂着したサバイバーの大部分は、子育て中の大きな鳥を撲殺してその肉を食べていたのである。¹⁹道具も火も持っていなかった長平たちは、撲殺したアホウドリを引き裂いて生のまま食べていたのであるから、これを写實的に描写すれば、子どもの読者にとっては、かなり衝撃的な内容となるだろう。当然のことながら、このエピソードの扱い方は作家によって異なっている。以下、この点を中心に据えて四作品の特徴を見ていくこととする。

最初に挙げるのは、北村重敬（一八七四—一九五五）²⁰の『土佐の長平漂流談——日本のロビンソン』（一九〇二年）である。北村は、「将来世界の舞台に立って、立派な活動をする大国民をつくる」ために「海事思想を啓発して、航海探検貿易移住殖民等の念慮を起さずが捷徑だと思ふ」と執筆動機を明かしており、出版後には教育

関係の雑誌上にて『ロビンソン・クルーソー』に勝る修身教材として自作を売り込んでいる。²¹ここからわかるのは、北村がこの作品を、膨張主義的帝国主義思想に根差した児童教育という、明確な目的をもって執筆したことである。そのような作品では、凄惨な食料調達作業も楽しい狩猟として描かれ、勇敢で行動力のある日本人漂流の英雄性を表現する手段となる。北村は、長平たちがアホウドリを初めて目にした時の様子を次のように描写する。

これは面白い、それを捕へてやるーと思つて、やつてゆきますと、ふしぎなことには、その大鳥は、人を見ても逃げません。そこで四人は、ちよつとおさへてはしめころし、ちよつとおさへてはしめころし、暫時の間に二十羽ほど捕へました。四人は大喜びで、この鳥を食料とすることにしました。²²

北村は、より直接的な「教育」も忘れてはいない。アホウドリの異名、分布や形態について説明し、子どもの読者に博物学的知識を与えようとする。

この大鳥は、とーくろーと申す鳥で、熱帯地方に居る鳥です。あほーどりとも、ばかどりともひます。大変に大きな白い鳥で、羽をひろげると四尺ほどもあります。人におそれませんから、素手で捕へることが容易です。されば、この鳥は漂流者にとつ

ては、唯一の食料です。ロビンソンも万次郎も、この鳥をくつて助かったといふことです。(二七―二九頁)

島の唯一の食料であると強調することによって、鳥を「おさへて」「しめころ」すという行為の必然性を読者に感じ取らせるとともに、有名なサバイバーの名前に言及することで、長平を彼らと同列の存在であると印象づけようという著者の意図が読みとれるだろう。

南洋一郎(一八九三―一九八〇)⁽²⁵⁾の『水夫長平無人島漂流記』(一九四三年)も、海事思想への共感に基づく児童教育を主眼に据えていた点では、北村作品と軌を一にしている。南もまた巻頭で執筆意図を明確に示しているが、それは、全国民が「鉄の一丸となり、おのの自己の力を全部君国にささげて八紘一宇の大理想の完遂に奉仕」すべき非常時において、「昔の船乗りのあらはしたりっぱな精神を知り、感動し、それにならふ」ことで、「たくましく生き抜く力を養成」⁽²⁶⁾したいというものであった。とはいえ、『吼える密林』(一九三三年)以来、秘境や密林を舞台にした冒険小説で少年読者の心を鷲掴みにしていた人気作家の筆力は、素人の青年教師のそれとは比すべくもない。

彼らの見た信天翁は翼の長さが二米以上もあつた。その翼をびんとはつて大空を飛ぶ姿は、美しくもあり雄大でもあつたが、地上ではのろくさかつた。飛びあがるときは飛行機のやうに両

翼をひろげて滑走する。

その速さは人間の走るのよりおそいので追ひかけてとらへることもむづかしくなかつた。それに、少しも人間をこわがらないので、さうさなく四五羽をつかまへ、石でうちころし、岩穴へ持ちかへつたが、料理する道具も火もない。船板についてゐた船釘をうちのぼして小刀につくり、それで肉を切りきざみ、海水で洗つて食つたが、その味のよさは山海の珍味にもまさるかと思はれた。⁽²⁷⁾

ここで南は、簡潔ながらも的確な描写力でアホウドリの生き生きとした姿を示したのちに、人間がその鳥を食料にして消費する過程を冷静かつ客観的な筆致で描出する。その結果、読者に強く印象づけられるのは、サバイバーたちの生きる力であり、自然界の征服者・生き物の王者としての人間の姿となる。

南は、登場人物一人ひとりにはっきりとした個性を与え、記録に残る数々のエピソードに独自の脚色を加えて、ストーリー性豊かな読み物に仕立てている。冒険物語の常道として、主人公長平の英雄性が強調されていることは言うまでもないが、ここで注目すべきは、水夫頭たる源右衛門の造形である。経験豊かなこの老水夫は、意気消沈する水夫たちを慰め、励まし、無人島での生活の立ち上げに際して強力なリーダーシップを発揮するのだが、最年長者としてのその知識や見識が、「食」を通して示されるのも興味深い。たとえば、

アホウドリを食べたのちには、将来役立てるためにその羽を保管するよう命じ、若い者たちが手当たり次第に殺したり余分な肉を放置したりすると、乱獲を戒め、無駄を無くして備蓄に回すよう促す。

「こりや、とんでもない心得ちがひちやぞ。すべて物といふものは、ありあまつたからといって無駄にするものではない。米粒もないこの島で生命をつないで行けるのもこの鳥や貝のおかげではないか。もつたいたいありがたいと思つたら、無断にはできまいがな……」⁽²⁸⁾

のちに長平が「米がゆたかにみのり、清らかな水がどこにも流れてゐる日本の國に生まれそだつたことが、どんなに幸福だったか」と嘆息し、「清水もぎぶぎぶと使ひほうだいに使つてゐたことが、悔やまれた⁽²⁹⁾」と自省するのも、このような源右衛門の教えがあったればこそである。ここからわかるのは、南作品ではサバイバル生活における「食」が、主人公に道徳的な気つきをもたらす教材になっている点である。つまり、読者である子どもたちは、この物語から、食物を粗末にしてはならない、食べものや食べものがあることに感謝の念を持たなくてはならないといった徳目を自然に吸収することになるのである。

戦後に出版された長平を主人公とする変形譚でも、「食」はしばしば教材としての役割を果たしているが、その内容には大きな変化

がみられる。たとえば谷真介（一九三五―）の『鳥の島漂流記』（一九八〇年⁽³⁰⁾）と三田村信行（一九三九―）の『にっぽんロビンソン——土佐の長平・無人島漂流記』（一九九八年⁽³¹⁾）に共通するのは、地理、理科、道徳に加えて、環境教育の要素が加わっている点である。両作家はいずれも、「あとがき」で鳥島の歴史に触れ、特にアホウドリのおかれた状況について詳しく説明している。長平たちが暮らした当時には、島全体を覆い尽くすほどだったアホウドリは、その後、羽毛めあての業者による乱獲と火山活動の活発化によって、終戦直後には絶滅が宣言されるほどにその数を減らしていたのである。一時中断していた鳥島での調査・保護活動は一九七〇年代後半から再開され、九〇年代に入ると環境省主導の法的保護も加速した。谷と三田村の作品は、このような時代背景のなかで生まれてきた作品である。

環境保護意識が浸透した社会では、自然はもはや征服すべき対象ではない。作品執筆時にはすでにベテラン作家となっていた谷や三田村が描く長平たちの食料調達活動は、サバイバーたちの生きる力をくつきりと浮かび上がらせている点で、南洋一郎のそれに比肩する。彼らが南と決定的に異なるのは、生き延びるために奮闘するサバイバーに、罪の意識を背負わせている点である。たとえば谷は、長平に次のように語らせている。

「三年のあいだにわたしはもう何百羽とも知れぬ鳥を殺生して

きました。この鳥を食わなければ生きられぬのだからしかたがありませんが、いつの日か国もとへ帰ったら、この鳥たちへの感謝として、生涯鳥の肉は食わないことを心にちかっているのです。⁽³²⁾」

谷の描く長平は、後着漂流者とともに月に一度アホウドリを食べない「精進日」をもうけさえする。同様に、三田村版の長平も、衰弱した肉体に必要だとわかっている、アホウドリの卵に手を伸ばすことをためらう。長平はその理由を、親鳥たちの肉に加えて卵までとるのは「罪深いような気がしたから」⁽³³⁾だと説明する。さらに、三田村版には次のような描写もある。

大鳥は、あいかわらず、わたしたちをおそれませず、にげもしませんでした。わたしたちが、自分たちの命をねらうおそろしい敵であることをうたがいもしないのです。そんな鳥たちを見ていると、なんだかすまない気持ちになってきました。

「かんにんしてくれ。おれたちが生きるためには、おまえらが必要なんじゃ」
 気やかなさしい長六は、涙をぼろぼろこぼしていました。⁽³⁴⁾

北村版サイバーが「ちよつとおさへてはしめころ」した時、ア

ホウドリとは、人間が自由に利用してよいものにすぎなかった。また、南版では「山海の珍味にもまさる」食べものだった。だが、谷と三田村の作品では、アホウドリは、自分たちと同様に命を持つ生きものとして捉えられているのである。戦後のサイバーたちが背負われた罪の意識は、このような自然観や人間観の変化によるものだといえよう。また、生きている鳥や魚を自宅でしめたり捌いたりして食卓に載せていた時代ははるか遠く、大部分の子どもが小さく切り分けられパック詰めされた食材としての肉や魚にしか接したことのない現代にあつては、谷版や三田村版のサイバーが食料調達活動のなかで示す強い抵抗感、読者に受け入れられやすい感情のほずである。パック詰めの肉や魚を食べている限りストレスを感じずにいられる社会にあつて、現代の作家たちは、この抵抗感をあえて描くことによって、生きることとは食べることであり、食べることは命をいただくことなのだ⁽³⁵⁾と子ども読者に伝えているのである。

おわりに

以上、長平を主人公にした子ども向けロビンソン変形譚四作について、食べものに関する描写を比較することでこのジャンルに生じた変化を確認してきた。実在の孤島生活経験者に関する記録をもとにした物語であるがゆえに、作品化にあたっては、同一エピソード

をいかに表現するのか、という点に各作家の個性が表出する。今回とりあげたのは、アホウドリを撲殺してその肉を生で食べるという、長平の食に関する記録のなかでも最も劇的なエピソードであるが、四人の作家たちの描写には明確な差異が確認できた。その差異は、単に作家の技量や表現手法の違いにとどまらず、作家が生きた時代の違い、作品を生んだ社会の違いに起因するところも大きい。戦前戦中期の作品が、アホウドリをせいぜい食べものとしかみなしていなかったのに対して、戦後の作品には、命をもった生きものに対する敬意や、人間の命を支えてくれることに対する感謝の念が顕在化していた。この違いは、人間と自然の関係の捉え方が劇的に変化したことから生じていると考えられる。紙幅の関係上、今回は、作品もエピソードも限られた範囲のみでの検証にとどまっているが、長平の物語にはほかにもさまざまな「食」に関する描写があり、ほかの鳥島サバイバーの物語についても同様である。これらについての考察はまた他日を期したい。

謝辞

本研究はJSPS科研費16K02431（児童文学におけるロビンソン変形譚の受容研究——「食」が示す「生きる力」の考察）の助成を受けたものである。

註

(1) たとえば、鶴見俊介・山下恒夫「《対談》石井研堂と江戸漂流記」、

一七頁（山下恒夫再編『石井研堂これくしょん 江戸漂流記絵集』第一巻、日本評論社、一九九二年、一六〇頁）、瀬田貞二「石井研堂解説」、四三三頁（『日本児童文学大系第三巻 石井研堂 押川春浪集』、ほるぷ出版、一九七八年、四二五―三四頁）など。

(2) この点については、拙稿「日本生まれのロビンソン——石井研堂の『鯨幾太郎』——」（『児童文学研究』第四八号、日本児童文学学会、二〇一六年一月、二三―三七頁）にて詳しく論じた。

(3) 年三俵の扶持米が藩から支給されたという記録が残っている（香我美町史編纂委員会編『香我美町史』上巻、香我美町、一九八五年、七〇―一七〇二頁）。地元には「無人嶋」「野村長平」「文政四巳年」「四月八日」と記された小さな墓石も残るが、縁者については度々の調査にもかかわらず不明となっている（『高知新聞』一九九七年三月五日朝刊 二五面）。

(4) 長平を主人公にした作品としては吉村昭『漂流』（一九七六年）が有名だが、もちろんこれは子ども向けではない。井伏鱒二にもノンフィクション「無人島長平」（一九三五年）や随筆「長平の墓」（一九三五年）がある。

(5) これら四作のほかに、岡本文良『アホウドリ』と生きた十二年——無人島と少年船乗りの物語』（PHP研究所、一九九八年）も条件にあてはまる。しかし、この作品は、長平を十二歳の少年として独自のエピソードで全体を再構成したフィクションであり、史実に依拠しながら細部に肉付けするという手法をとったほかの五作品とは大きく性格が異なるため、比較の都合上、今回の分析対象からは除外した。

(6) 石井研堂校訂『漂流奇談全集』博文館、一九〇〇年、三〇―一三七〇頁（国立国会図書館デジタルコレクション収録）。

(7) 春名徹「文学としての漂流記」、一六六―一六八頁（『江戸文学』、第三二号、ペリカン社、二〇〇五年、一六五―一七七頁）。

(8) 「無人島談話」は薩摩藩侍医を務めた曾榮という人物が、長平とともに帰国した薩摩船の乗組員たちから聴取した内容をまとめたもので、

後述する「坐臥記」と同様に、長平の主観的記述としての性格を持つ「漂流日記」の内容を、別の視点から補ってくれる資料と位置づけられる。

(9) 松江藩の儒学者桃西河(一七四八—一八一〇)の随筆集。後着船(資料⑧)の清三から聴取した島での生活の様子が記録されている。

(10) 北村は勘定奉行根岸肥前守による長平の取調記録に依拠したと述べ「読者に告ぐ」『土佐の長平漂流談』(頁一)、南は文献を特定していないものの、二百四十年前から存在した島鳥漂着者たちの記録に言及し、十二、三歳のころに父親の蔵書から見つけ出し、その後三十五年間くりかえし読んできた、と語っている(なぜ、私は本書を書いたか)『水夫長平無人島漂流記』(頁一—二頁)。なお、南は、エピソード部分で、わざわざ曾槃の名とその著作を挙げたうえで、長平が遠州船(資料②)と江戸船(同③)の漂流譚に接し、日州船(同④)の栄右衛門が同じ志布志の漂流譚(同①)を読むといったエピソードを盛り込んでいる。遠州船、江戸船、日州船の漂流譚を併録するというこの構成は、「無人島談話」を思わせ、曾槃自身を物語に登場させていることからみても、南の主典拠は同文献だったのではないかと考えられる。

(11) 流人として八丈島で暮らした近藤富蔵が、同地および周辺の島々について著した草稿七十二巻に及ぶ郷土資料。翻刻版では、第二巻第五編に「島鳥」の項があり、長平を含む漂着者たちに関する記録も収録されている(八丈実記刊行会編『八丈実記』緑地社、一九六四—一七六二年、二一一—二五〇頁)。

(12) たとえば、森下高茂『長平島物語』(一九二六年)。宮田定繁「長平漂流話」(一九六四年)。前者は岸本町青年団による企画出版物。墓地の整備および顕彰碑の建設とともに、郷土の偉人を称えるための事業の一環であった。著者が「緒言」で「高知新聞」に連載した内容をまとめなおしたものだとして述べているが、初出紙は確認できていない。後者はのちに、高知県警察本部教務課発行の雑誌『建別依』(たけよりわ

け)二二五号と二二六号(一九六九年九月号・十月号)に二回にわけて掲載されている。

(13) 公的記録類に記された情報や当時の漂民の帰国手続きに照らせば、作家たちがそろって語っている「行方不明になってから一三年目の同じ日に帰郷し」「実際に帰郷するまで長平の生存が地元伝わっていなかった」という内容には無理があるため、北村が創作し、森下や宮田がその影響を受けたと考えることができるかもしれない。だが、「伝説」「昔話」としての長平の物語にこのエピソードが盛り込まれていること(例・市原麒一郎編著『香南伝説散步』土佐民話の会、一九七六年。土佐教育研究会国語部編『高知の伝説』日本標準、一九七九年。大石久子『しばてん』二〇〇〇年頃、自费出版物)、北村・森下・宮田がいずれも高知出身であることを考慮すれば、彼らが「地元で語り継がれてきた伝承」を作品にとり入れた可能性もある。逆に、彼らの作品がそのような「伝承物語」の成立にどの程度影響したのか、という見地からの検証が必要なのかもしれない。

(14) 地名や人名の表記については、小林郁『島鳥漂着物語 十八世紀庶民の無人島体験』成山堂書店、二〇〇三年に倣った。

(15) 資料によっては船頭の名として挙がっていたために、あるいは、読み手がそのように解釈した結果、かつては「漂流日記」の書き手を儀七だと考える向きもあった。じつは、石井研堂もその一人である。『異国漂流奇譚集』(永倉書店、一九二七年、国立国会図書館デジタルコレクション収録)にその旨の記述がある(六二二頁)。また、仲原善忠は『日本漂流奇談』(イデア書院、一九二七年)に「儀七漂流日記」のタイトルでそのリライト版を収録している。だが、赤岡町史を紐解くと、長平が帰国した寛政年間に同地で栄えていた什器製造業者の中に「赤岡浦松屋儀七」なる者がいたことがわかる(『赤岡町史改訂版』赤岡町史編纂委員会、二〇一〇年、一五六—一五七頁)。軽々に同一人物だと特定することはできないが可能性は否定できない。ちなみに、奈半利浦で上陸した船頭の名を「重助」とする記録もある

- (16) 池田皓編、『日本庶民生活史料集成 第五巻 漂流』三二書房、一八六八年、四八一頁。
- (17) 「漂流日記」では、船親父（水夫頭）の源右衛門は、持病の癩を悪化させて漂着した年の九月に、長六と甚兵衛は、骨や筋に痛みを感じるようになり、やがて動くこともできなくなって翌八月から九月にかけて相次いで衰弱死したと語られている（山下再編、前掲書、四六一―四七〇頁）。
- (18) 池田編、前掲書、四九一頁。
- (19) 一九六〇年に、長平の物語は「長平漂流記」のタイトルで二〇〇頁分の読み物として小学校国語教科書に収録された。その際、学習の狙いが「強く生きようとする気持ちを育て、他人と協力し合う態度を育てる」（『小学校国語六年―1 大日本図書、一五九頁）だった。なお「長平漂流記」は一九六四年版にも収録されている。
- (20) なかには、アホウドリを殺さないという選択をした漂流民もいたが稀なケースといえる。資料二①がこれにあたる。石井研堂の「日州船漂流記事」に詳しい（石井校訂、前掲書、三五―五二頁）。
- (21) いわゆる「堺事件」における「恩赦八士」のひとり垣内徳太郎の息子。『高知県人名事典 新版』（高知新聞社、一九九九年）によれば「香美郡赤岡村生まれ」（二五七頁）とあるが、『南国市史』（南国市、一九八二年）および『長岡村史』（長岡村役場、一九五五年）によれば「西野地村三畠生まれ」（九四八頁、二九二頁）。地元の小学校で教鞭をとったのち、東京高等師範学校に学び、私立中学教員を経て師範学校に迎えられる、のちには各地の師範学校校長を歴任した。
- (22) 北村、読者に告ぐ、『土佐の長平漂流談』、一―二頁。
- (23) 北村重敬、「修身教材として土佐の長平とロビンソンクルーソーとの優劣を断ず」（『日本之小学教師』第三卷第三五号、国民教育学会、一九〇一年一月二日、一七一―一九頁）。その甲斐あってか、無名の作者の作品にもかかわらず、『土佐の長平漂流談』は翌年第二版が出版されている（秋田県立図書館と早稲田大学図書館に所蔵あり）。
- (24) 北村、前掲書、二七頁。
- (25) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (26) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (27) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (28) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (29) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (30) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (31) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (32) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (33) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (34) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (35) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (36) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (37) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (38) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (39) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (40) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (41) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (42) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (43) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (44) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (45) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (46) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (47) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (48) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (49) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (50) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (51) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (52) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (53) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (54) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (55) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (56) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (57) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (58) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (59) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (60) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (61) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (62) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (63) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (64) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (65) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (66) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (67) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (68) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (69) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (70) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (71) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (72) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (73) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (74) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (75) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (76) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (77) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (78) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (79) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (80) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (81) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (82) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (83) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (84) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (85) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (86) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (87) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (88) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (89) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (90) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (91) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (92) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (93) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (94) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (95) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (96) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (97) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (98) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (99) 北村、前掲書、二七―二九頁。
- (100) 北村、前掲書、二七―二九頁。

（提出日 平成二十九年九月二九日）